「平和」という難問

― 国連ソマリア平和維持活動の苦闘 ―

A－６　　岩井　輝修

目　　次

第 1 章　この研究のきっかけ
第 2 章　ソマリア派遣ミッションまでの国連
（1）90 年代以前―国連紆余曲折―
（2）90 年代以降―ガリ事務総長―
第 3 章　他の平和維持活動との比較
第 4 章　ソマリア派遣ミッションについて
第 5 章　問題点
第 6 章　総括

第１章　この研究のきっかけ

2001 年 9 月 11 日、アメリカ同時多発テロが起こった。21 世紀になっても戦争・紛争・テロなどは終わりそうにない。人はみな平和を願っているのになぜ平和にならないのか？このことについて私はもともと興味を持っていたので、人間科学研究の授業を通じて調べてみようと思った。

平和の定義は非常に難しく、『広辞苑』によると「戦争がなくて世が安穏であること」という意味であるが、なかなか客観的評価が難しいものである。歴史ごとに過去の「平和な時代」を調べていて感じたことだが、教科書で同様に「平和」で括られている言葉であっても、それは一定の領域内の範囲のことであったり、単なる支配のイデオロギーの可能性である場合もあったりする。そこで私は切り口を変えて現在の平和に対する大きなアクションである国連の平和維持活動に調べてみた。また国連の平和維持活動だけとってもテーマが大きいので「失敗した」といわれるソマリア派遣ミッションのみを中心に絞り、他のミッションはソマリア派遣ミッションとの比較だけにとどめる。理由は比較的資料が揃っていること、最初の動機に近い事が挙げられる。加えて、ソマリアの危機的状況ために善意で立ち上がったにもかかわらず、平和維持活動が挫折したことは「平和を皆望んでいるのに達成できないという矛盾」の手がかりになりそうに思われたからである。

ソマリア派遣ミッションについては失敗だったのかそして何が失敗の要因かを調べ、主にそれには国連関係の文献を用いようと考えている。そこから「世界平和」についてなにか獲るものがあればと思う。

第２章　ソマリア派遣ミッションまでの国連

（1）90 年代以前―国連紆余曲折―

第一次世界大戦後、初の世界大戦などを経験して米大統領ウィルソンは国際平和機構として国際連盟を提唱した。しかし、国際連盟は安全保障上の欠点、国際的政治状況に翻弄されたこと、矛盾した思想などのもろもろの脆さのために第二次世界大戦を防げなかった。

第二次世界大戦の末期、連合国の指導者達は国際秩序について討議し、国際連盟に代わる国際機構としての国際連合を成立させた。連盟の安全保障上の欠点①軍事制裁ができない、②アメリカ・ソ連の大国の不参加、③決定方法は全会一致などを修正され、国際連合は発足した。そして武力制裁も可能な五カ国の常任理事国と十カ国の非常任理事国からなる安全保障理事会が設立された。これはミュンヘン会談(1)などのファシズムの台頭を防げなかった反省が色濃く出ており、常任理事国の拒否権というリミッター付での武力制裁容認はその反映だと思われる。しかし、冷戦中の米ソ対立による拒否権発動は安全保障理事会の機能を麻痺させてしまい、更なる紛争を防ぐことはできなかった。いや拒否権連発がなくとも大国同士の協調無くしては戦争を防ぐことはできまい。

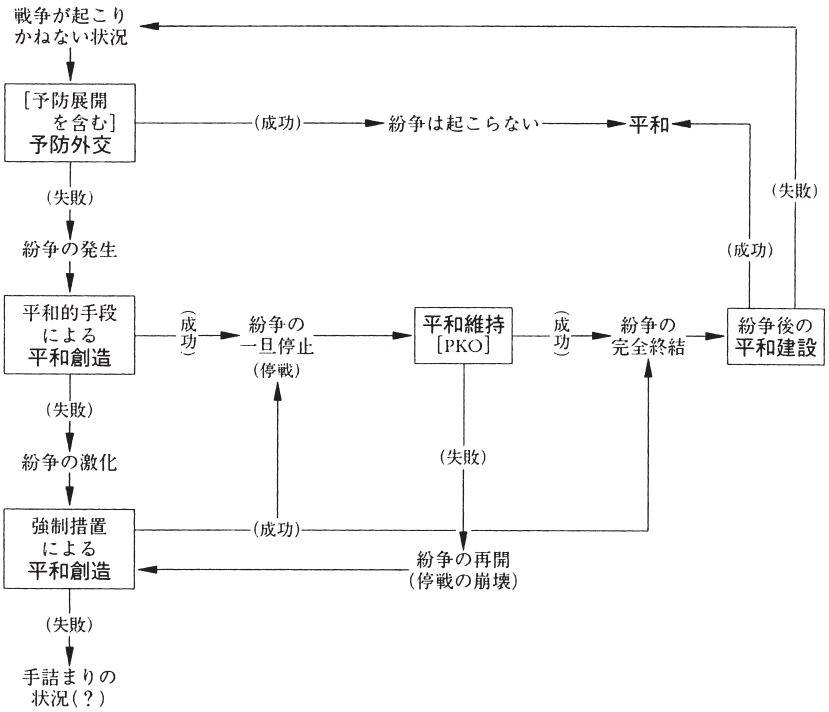
朝鮮戦争、サンフランシスコ平和条約、キューバ危機、そして常任理事国の入替わり（中国）等、国際情勢は紆余曲折を経て、ソ連ゴルバチョフ書記長のペレストロイカの結果として、東西冷戦が終結する。冷戦以後は国際協調のひとつの枠組みとして国連が見直され、安

復活する（始動と言った方がいいかもしれない）。湾岸戦争では国連軍が整備されていなかった為、アメリカ軍を中心とする多国籍軍が編成された。

2）90年代以降―ガリ事務総長―

湾岸戦争の後、国連の集団安全保障が機能するのではないかという期待が寄せられた。92年安保理サミットの要請を受けてブトロス・ブロドス＝ガリ（以下ガリと呼ぶ）事務総長が国連の平和機能強化に関する報告書「平和への課題」を提出した。「平和への課題」はこれからの国連の平和活動はどうあるべきかの方針のようなもので、それまで以上に国連は平和にむけて積極的に動こうという意図の表れである。「平和への課題」のガリ構想は予防外交、平和創造、平和維持（PKO）、紛争後の平和建設、平和強制の五概念からなる。その構造は下記のようなものである(2)。「平和への課題」の特徴は、国連は武力紛争の予防からその終結まで紛争の全局面で積極的に役割を果たし、国連の軍事的強制行動の重要視していた。斉藤氏は「国連の集団安全保障を活性化したいというガリの願望が強く伺えた」と述べている。ともあれ国連は「平和への課題」を目標に活動を開始し、おりしもソマリアの危機的状況が明らかになり始めた。

図1　ガリ構想の構造



（『安全保障学入門』より転載）

第３章　ソマリア派遣ミッションについて

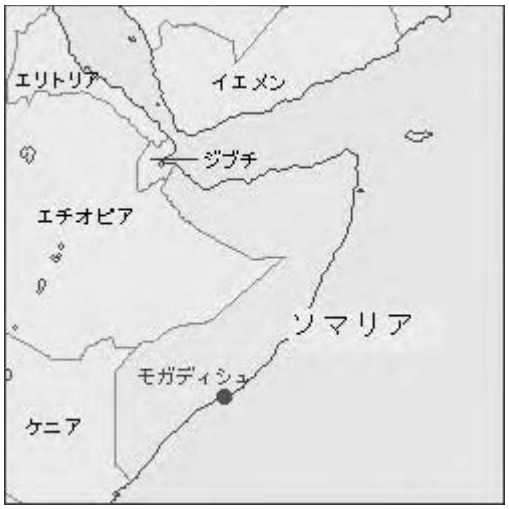
ソマリアは東アフリカ、「アフリカの角」と呼ばれる地域にある[3]。1991 年シアド・バーレの独裁政権が崩壊したことを契機として激しい内戦が勃発した。加えて飢饉も発生し、各地の武装勢力が衝突を繰りかえした。

首都モガデシオでは独裁政権を打倒した統一ソマリア会議の内部争いが激化、暫定大統領であるアリ・マハディのグループとアイディド将軍率いるグループの二大勢力の激しい戦争が繰り広げられていた。1991 年 12 月、首都を脱出したアリ・マハディ暫定大統領が PKO の派遣を要請した。国民は飢餓状態がすすみ、人道的支援の必要性が叫ばれた。しかし内戦が進むにつれ救援物資略奪や NGO や国連職員の襲撃のために援助も満足に行えなかった。

92 年 4 月安保理決議 771 で平和維持活動として第一次国連ソマリア活動（UNOSOM Ⅰ）の設置が決められた。これは二大武装勢力の停戦合意の後を鑑みたものである UNOSOM Ⅰの主な役割は通常の PKO 任務である停戦の監視に加え、人道援助の警護や包括的な平和実現のための政治活動なども含まれた。しかし 50 人の監視委員と 500 人の警護部隊では現地の多数の武装勢力を抑えるのは困難であり、警護に必要な紛争当事者の同意も得られず、困窮の度合いは深まるばかりだった。

これに対し国連は 92 年 12 月安保理決議 774 で加盟国からなる兵力からなる部隊の設置が決定された。統合機動部隊（UNITAF）と呼ばれるこの部隊の任務は人道援助物資を行き渡らす為の施設（駅・港）を安全にし、輸送路や物資の警護だった。事務総長は武装解除も任務にしたかったのだがアメリカの主張が通ることになった。UNITAF は初の国連の武力行使であるが、紛争の制裁でなく支援活動のサポートに用いられることになった。アメリカ主体の多国籍軍は圧倒的な兵力であり、武装勢力の抵抗も減った。効果は着実になり配給が再開されると餓死者は大幅に減少した。しかし、武装解除には消極的であり、安定は一時的なものであって国連部隊が去ってしまえば内戦が再燃してしまう問題点があった。

93 年 3 月安保理決議 814 より第二次ソマリア活動（UNOSOMⅡ）が設立された。その任務は人道援助、停戦監視、武装解除、地雷除去、難民帰還など多彩であった。特に二大武装勢力アリ・マハディ派とアイディド派の武装解除を目的としていたが、アイディド派はそれを拒み、UNOSOMⅡを挑発。アイディド派と思われるパキスタン兵への襲撃を皮切りに UNOSOMⅡの武装解除は米軍とアイディド派の対決へと変貌する。アイディド将軍の逮捕など対決姿勢を明らかにする中、ソマリア人はアイディド派に結束し、国連と米国への敵対感情を深めた。



転機が訪れたのは 93 年 10 月 3 日の武力衝突による米兵の死亡だった（モガディシュの戦闘[4]）。

この事件がアメリカ国内の世論を喚起し、クリントン大統領は完全撤退を表明、諸国もこれに続き、ナイロビで和平会議が行われたものの成果は上がらず、UNOSOMⅡは引きあげた。その後外部の介入がなくなった後も戦闘は続き、紆余曲折

の後ユスフ暫定政権がソマリア内の治安回復と施政権獲得の機会を模索している（2005 年 6 月 13 日）。

この様に意気揚々と始まった国連による安全保障、ガリ事務総長の「平和への課題」方針はソマリア派遣失敗によって変更を余儀なくされる。またソマリアほどあからさまでなかったにせよ同時期に行われたコソボ派遣も成功と呼べるものではなかった。こうして軍事的強制力をもたせた平和活動に国連は暫くの間慎重な態度をとる。

第 4 章　ソマリア派遣ミッションの問題点

私が思うにソマリア派遣ミッションには 4 つほど問題点が存在する。

① なぜ UNOSOM I が治安回復できなかったのか？
② なぜアイディド派は国連の武装解除に協力しなかったのか？
③ アメリカの派遣時期について
④ なぜ撤退せざるをえなかったのか？

ひとつずつ順を追って見てみよう。

① なぜ UNOSOM I が治安回復できなかったのか？

やはり人数の少なさが原因ではなかったかと思う。軽武装で 500 人程度ではなかなか抑止力にもならなかったと考えられる。UNITAF に引き継がれた後は米軍 28000 名とその他の軍 10000 名以上の「希望回復作戦」によって被害者に救援物資が届き二ヶ月で一日平均 3000 人の餓死者から 1000 人未満へと状態好転させることができた。このことからも、もっと人手がいったのではないかと推測される。

② なぜアイディド派は国連の武装解除に協力しなかったのか？

武装解除は UNOSOM II の任務であった。前任の UNITAF はある程度の成果を上げることができたのに対してなぜ UNOSOM II はその任務を遂行できなかったのだろう？

私は武装解除という任務の難しさにあると考える。アイディド派はアイディド将軍率いる最大のグループであり、武器（武力）を手放すのはデメリットに感じたのではなかろうか。またアイディド将軍は国連撤退後の行動もからもわかるように野心的な人物でもあった。武器は武力であると同時に自分の命を守るための道具でもある。平和の時代と地域に住む私にはわからないほどの有難みがあるのではなかろうか。ソマリアではないが、武装解除において武器を破壊するとき、自分自身で自分の銃を破壊しながら若者は涙をながすそうである。

あるサイトには人数不足が原因だとしていた。確かに UNOSOM II 発足当初は UNITAF の時より少なくっているようだが、増強もされているようだ。いつの時点でどのぐらい増強されていたのか資料を見つけられなかったので保留しておく。

③ UNITAF 派遣の派遣時期について

国連の多国籍軍はどのミッションでも大多数がアメリカ軍である。その多国籍軍の指揮権

も自発的な調整に基づくものであっても、やはり大軍の発言力は非常に大きい。そうでなくとも国際政治でアメリカの存在は大きいのだ。

UNITAF 派遣はアメリカの後押しがあってこそだったのだが、その時期は適切だったのだろうか？ガリ事務総長にブッシュ大統領（父）が米軍主導の派遣部隊（UNITAF）をソマリアに送ることを了承したのは 11 月 25 日、その安保理採択は 12 月 25 日だった。しかし大統領選挙は 11 月 3 日の時点で既にクリントンの勝利と決まっており、湾岸戦争報道の時のように選挙のプラスにはならず、ソマリア派遣を決定しても後の祭りであった。しかもソマリア情勢はその時点でもかなり悪化していた。先行き不透明な状況に関わらず軍隊派遣だけを決定して、その後の処理は次の政権というのはどうかと思う。

④　UNOSOMⅡはなぜ撤退せざるを得なかったのか？

一言で言ってしまえば最大の派兵国、アメリカの世論が自分達の軍がソマリアにいることに NO と言ったからだ。この結果はアイディド派の武装解除拒否の時点から因果関係の鎖でつながれものであるように思えてならない。

アイディド派の拒否に妥協すればその時点で UNOSOMⅡの任務は失敗である。だがその時点で撤退すれば米兵の死はなくなったかもしれない。事実は当初の理念に沿いそのまま交渉を続けたようだ。そのため、UNOSOMⅡの存在を疎んじたアイディド派はプロパンガンダで地域民に国連およびアメリカを敵視させる。そしてパキスタン兵に対する攻撃はUNOSOMⅡを対アイディド派作戦に没入させるに至る。ベトナム戦争について研究もされていた。モガディシュの戦いでアメリカ兵が亡くなるとアメリカ国民は「なぜソマリア人に対する「人道援助」で行ったはずの兵士が、あまつさえソマリア人に憎まれて殺されるのか？」と不条理を感じ憤激した。この感情をクリントン大統領も無視できるはずがなかった。

わかりやすい原因と結果をつなげただけという感じもするし、上記の説明は財政的な事は何も述べていない。きっと他の要因もあるだろう。ただ上記の説明だけでも「平和」と名がつくものであっても強制介入に困難さを感じるには十分だろう。

第 5 章　他の平和維持活動との比較

一般的にソマリア派遣は失敗に終わったといわれている。「任務の達成」を成功と定義するなら確かにかそうかもしれない。だがソマリア派遣ミッションを行った部隊は 3 つありその目的、任務はそれぞれ異なっていたのであるから今回は成功・失敗の原因を部隊ごとにわけて考え、加えて他の 4 つの平和維持活動と比較してみた[5]。

＜90 年代の国連平和維持活動＞

	時期	目的（任務）	発端	地域の状況	結果	備考
UNOSOM Ⅰ（ソマリア派遣）	90 年 4 月～93 年 3 月	停戦の監視 人道支援の警護	飢餓 人道救助 活動の危機	内戦中	失敗	武装勢力の抵抗
UNITAF（ソマリア派遣）	92 年 12 月	支援活動のサポート	UNOSOM Ⅰの失敗	内戦中	成功	
UNDOMⅡ（ソマリア派遣）	93 年 3 月～95 年 3 月	武装解除など	UNITAFのつづき	内戦中	失敗	中立性の崩れ アメリカ世論
マケドニア派遣	92 年 12 月～95 年 3 月	ユーゴ紛争の飛び火防止	マケドニア大統領の要請	隣国は紛争中	成功とされる	予防外交
ボスニアヘレツェゴビナ派遣	92 年 4 月～96 年 1 月	停戦の監視 人道支援の監督	ボスニアと新ユーゴスラビアの停戦協定	国家、宗教、民族、言語が絡み合う混乱状態	NATO の空爆まで悪化	経済制裁の効果 NATO の強制行動
エルサルバドル派遣	91 年 7 月～95 年 4 月	和平協定の監視	政府軍と非政府軍の人権協定の締結	倦戦感があった	目的は達成	撤退後の地域発展
ウガンダルワンダ派遣	93 年 6 月～94 年 9 月	状況悪化に伴う調停活動	暫定政府成立	少数民族と多数派民族と軋轢 ジェノサイド	？	国連の財政難 他ミッションの失敗、判断がわかれる是非

マケドニア派遣を除いて停戦を当事者同士守ってもらうことが任務に入っていることにまず注意していただきたい。マケドニア派遣の場合は「紛争予防」といわれるものである。「紛争予防」もガリ事務総長の「平和への課題」のうちの項目のひとつで、紛争がその地域に起こる前に押さえ込んでしまおうというものだ。このマケドニア派遣は国境付近に警備兵を置きほぼ隣国の紛争が飛び火するのを防いだ。国連の中立性の問題が取り沙汰されるが成功といって差し支えないだろう。

翻って、他の例を見てみるとほとんどが紛争中または停戦中であり、この停戦もよく破られがちである。おおむねこのようなミッションは失敗に終わっており、成功といわれるエルサルバドル内戦もすでに住民に倦戦感があり、交渉を進めやすかったのではないかと推測する。ウガンダ・ルワンダ内戦の特筆すべき点はやはりジェノサイドであろう。ジェノサイドを抑止できなかった国連平和維持活動に非難が浴びせられることもあった。ボスニアヘレツェゴビナ紛争の場合は当事者各々の利害関係複雑であり、「戦争広告代理店」など撹乱要素が存在し、より和平仲裁は困難を極めた。このように国連の仲裁には限界があり、とくにお互いが戦う意志がある時には困難な様である。

第６章　総括

以上国連によるソマリア派遣ミッションを見てきた。私はこのミッションの問題点には二つの大きな問題が根底に横たわっていると考える。

ひとつは国連のカタチそのものであり、その限界である。国連は世界各国の上に立つ統合組織ではなく、あくまで世界各国の集まり、会議の場のようなものである。私はこのことを調べるまで前者の方に国連を認識していた。当然その「会議の場」では国家間のパワーゲームや思惑が存在する。ソマリア介入についていえば、アメリカという親分が抜けたことでその他の国家の軍が抜けていくのがまさにそれにあたり、国連の意志はあまり反映されない。また自国兵の死に憤慨する国民に対し国連はその説明をすることはできなかった。

二つ目は武装解除の問題である。他の国連派遣ミッションにおいても見たように紛争の雰囲気が残っている中で武装解除は困難のようだ。武器の存在が生命線に思えるのも理解できる。当事者同士にもう武器は必要ない、という認識を持ってもらうのが何よりも重要であるが容易ではない。

調べていて一番印象に残ったのは「なぜソマリア人のために赴いたアメリカ兵が、ソマリア人に殺されなければならないのか」という怒りに答えられないということであった。すくなくともアイディド将軍個人の横暴さだけに還元できなさそうである。国連軍の兵士達はソマリア人道支援の為におもむいたが、ソマリアの人達に「人道」が伝わらなかったのではないかと思う。

そもそも私は「なぜ戦争を皆望んでいないのに、戦争はいつの時代でもおこりつづけるのか？」と疑問が動機であった。今、この疑問を考えてみようと思う。私は、人の平和に対する優先順位が人のその時の状況によって変化するものではないか、と考える。確かに人はだれしも平和を願っているが、それが常に一番だとは限らない。時には、自分、家族、国家、正義、宗教のために平和は二の次になる。極論すれば自分が殺されようが、家族が殺されようが、国が侵略されても、相手が悪でも、人類皆が戦争を望まないのなら「世界平和」は達成されるであろう。家族が殺されるのを黙って見ているのを人間的か、戦争をするのが人間的かという疑問が浮かぶが、そもそも人間的というものも人によって異なる。

ここまで見てくると私は非暴力主義を主張しているようだが異なる、というかそこまで主張できない。ひとつの名前を付けられている考え方や概念でも、それは個人によって異なり、万人が共通するものは現実におけるアクションのみである。「世界平和」を達成するにはまず人が皆平和を第一に考えられるような状況が必須である。20 世紀後半の日本や北欧が平和で、先進国の市民が戦争に巻き込まれなかったのはそれが理由であるし、そこに希望の糸があると思う。アメリカにおける同時多発テロは貿易センターだけでなく先進国の安全神話も打ち崩してしまった。少なくとも、大多数の人間が平和を主張するには自分の安全神話が必要である。

こうみると、「世界平和」を不可能にも思えてくる。しかし、国連もソマリア派遣ミッション後も今に至るまで、より良い方法を模索しなら平和活動をしており、なくすことはできなくても戦争の被害者を減らすことに意味があると私は考える。

注

(1)　ミュンヘン会談は、1938 年 9 月、ズデーテン地方の問題に関して、イギリスのネヴィル・チェンバレン、フランスのダラディエ、イタリアのベニート・ムッソリーニ、ドイツのアドルフ・ヒトラーが行った会談。戦争によってでもズデーテン地方を併合すると主張したヒトラーに対し、イギリス・フランスは、これ以上の領土要求をしないことをヒトラーに約束させた上で、彼の要求を認めた。イギリス・フランスの宥和政策の典型といわれる。後にドイツはこの約束を破る。

(2)　この章は防衛大学安全保障学研究会編『安全保障学入門』を参考にさせていただいた。

(3)　地図は、外務省ホームページ各国インデックス（ソマリア共和国）より転載した。

(4)　モガディシュの戦闘とは、UNOSOMⅡと独立していて活動していた米軍特殊部隊がアイディド派と武力衝突した事件である。この時の銃撃戦によりアメリカ軍兵士 18 人、ソマリア人民兵・市民に 350 人以上の死者を出し、米軍のヘリ「ブラックホーク」二機も撃墜される。後にリドリー・スコット監督により、『ブラックホーク・ダウン』として映画化された。

(5)　斎藤直樹『国際機構論』を参考にさせていただいた。

参考文献

河辺一郎『国連政策』（日本経済評論社、2004 年）
伊勢崎賢治『武装解除』（講談社、2004 年）
斎藤直樹『国際機構論』（北樹出版、2001 年）
防衛大学安全保障学研究会編『安全保障学入門』（亜紀書房、2001 年）
坂口　明『国連、その原点と現実』（新日本出版社、1995 年）
小室直樹・色摩力夫『国民のための戦争と平和の法』（総合法令、1993 年）

参考サイト

『安全保障のススメ』
http://web.sfc.keio.ac.jp/~kenj/security/archives/2005/06/post_21.html
『国連の人道的介入』
http://members.jcom.home.ne.jp/romensakura/study5.html
『外務省外務省ホームページ各国インデックス―ソマリア共和国―』
http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/somali/index.htm

〔コメント〕

「平和」について正面から取り組もうとした岩井君の最初のもくろみは、平和の維持という観点から国連の活動を考察するという形でまとめられました。5ヶ月ほどの限られた時間の中で、よくここまで問題を絞り込めたものだ感心するとともに、歴史の評価が完全に定まったわけでもない現代史を取り上げることの難しさも痛感しました。私たちはこういう大きな問題に対して、ともすれば無力感から目をそむけがちですが、本当はふだんから念頭に置いていなければならないことを、再認識した次第です。

（辻　正博）